

2020/1/12-2

(英語教育に関する文科省への提言 その5)

今回は少し技術論的に述べてみます。

日本語は語彙を逐一覚える one to one 言語。英語は語彙をその場の状況でいかようにも作り出すことができる one to many でフレキシブルなアドリブ言語。

また日本語は、各単語を細部まできっちり規定されて覚えるのに対して、英語は中核イメージ(映像)を覚え、その周りは極めて緩やかであいまい。そうして中核イメージ(映像)の周りは派生だらけのような気がします。

例えば compromise という英単語があります。

原義は文字を見る限り、com「共に」と promise「約束」でしょうか。イメージとしては、お互い歩み寄って約束を守ろうね、みたいな感じです。

ところが、これを日本語に訳するとなると、一番レフトサイドが「never compromise taste(味に関しては妥協しないわよ)」の「妥協」次が「oh, Just met at compromised point(お互いちょうど、それぞれの家から真ん中のところで会えたね)」の「折衷点を見出す」そして最右翼が「you love Platinum, I love Gold, then I ordered Platinum gold ring for engaged ring. It's nice compromise!! (君はプラチナが好き。自分はゴールドが好み。で、結局プラチナゴールドの指輪にしたよ。いい解決法(折り合い)だろ)」と対立を乗り越えての「折合い」言い換えると「止揚」(アウフヘーベン)と、たった一つの中核イメージの単語が状況に応じて様々に使われるのです。

中核にあるのは「ともに約束」(双方が歩み寄って手を握るイメージ)だけです。

ところが日本語にすると「妥協」「折衷点を見出す」「止揚」とそれぞれに単語が発生し、それぞれが全く違った印象を与えることになるので、それを一つ一つ覚えるわけですが、英語の中でその作業をすると、とんでもない数の単語を覚えなくてはなりませんし、当の外国人には、そんな細かい単語を使い分ける習慣がないので、むしろ日本人が使う英単語が難しすぎてわからないことすらあるのです。

曰く「どこからそんな単語引っ張り出してきたの?」とか。

英語は一つの単語から状況に応じていろんな意味に使われますが、その中核にあるイメージは一つです。ですから単語を意味としてではなく映像(イメージ)として捉え、その状況によって派生する映像(イメージ)の変化が日本語の各逐一の意味となり単語となっているのだという基本構図の差を教育開始の第一番目に教えることが何よりも肝要だと思います。或いは日本人が苦手な前置詞を含んだイディオム(成句、常套句)なのですが、これも、例えば at ならピンポイント、on ならその上に置くか重ねる、時間軸でいったら続ける、in なら中で、into となったら in+to なので、その中にどんどん入っていくイメージさえつかんでおけば、動詞との組み合わせでどんどんアドリブ風に文章表現ができてしまうのです。それをいちいち成句として覚えようとするからえらいことになってしまうのです。

Go on and on and on といえば、空間軸なら「どんどん先に進んで」にもつかえますし、時

間軸なら「どんどんその先を続けて」にもつかえるのです。

At the time といえば at はピンポイントをイメージさせますから「ちょうどその時」つまり Just に近い感じでしょうか。Just at the time 「まさに丁度その時」といっても問題ないでしょうし。

ですから、この変転極まりない動詞と前置詞の組み合わせを、その数だけ逐一成句として覚えるなどという無駄な作業をせずに、動詞の中核イメージ（映像）と前置詞の中核イメージ（映像）それぞれだけを数を絞って教え、後は生徒に任せるやり方の方が、よほど会話力が付くとおもいます。

そもそも動詞+前置詞の組み合わせの数だけ成句を覚えた頭では、会話の急展開に頭がついていかず、成句を探している間に会話がどんどん先に進んで、置いてきぼりを喰らってしまいますから、結局話が弾まず、言う方も聞く方も白けた感じになって二度と会話をしようとは思わなくなってしまうのではないのでしょうか。

このように、英語は非常にフレキシブルなアドリブ満載の言語なので、法則性に長け、様式美に長けた日本人には、この不規則性やアドリブ性が、却ってわかりづらいのかもしれない。台本がないと喋れないお笑い芸人とアドリブじゃないと乗らないお笑い芸人の違いみたいなものかもしれません。

もう少し簡単に言うと、日本語は縦横（たてよこ）の「マトリクス整合がきちんとしている言語」で「覚える言語」英語は「マトリクス整合は曖昧な言語」で、その場の状況居合わせて「適宜、どんどん作り出すアドリブの言語」なのです。

ですから、余り語彙は必要ないですし、辞書もそれほど引かなくていいのです。

以前自分は「辞書を置かない（引かない）英語教室」というのを主宰したことがありますが、どうやらそれは、日本の方にはほとんど何のことかわからなかったようです。

このように、法則性があいまいに見えるため、様式美に慣れた我々日本人には却って捉えるのが難しいのかもしれません。

反対にアジア人が英語をそれなりに話せるのは、英語が上述の one to many なフレキシブル言語であり、自分でもそれなりにその場の状況で生み出せることを知っているからだろうと思っております。

最後に肝だけ手短にまとめますと

まずは、動詞と前置詞の中核イメージ（映像）だけしっかり教え、英語を覚えるのではなく、むしろその組み合わせの英語をどんどん作り出していく（創造していく）のが本道だとガイドを示すことが寛容でしょう。

そして、今一つは、その中核イメージ（映像）を、絵を（映像を）説明するように話すと、よりお互いの頭に共通映像が映し出されて、会話の理解が進むので話が弾みやすくなるかと思っております。

そして最後の最後にもう一点。型から入るということは外枠が先にできることです。すなわち最終形が先にしめされてしまうので、現在をゴールから見ることになり、常に未達成感、

不足感、マイナス感が伴うことになることだけは御記憶くださいませ。すなわち初めから減点法思考でスタートしているのだと。
それでは、子供がかわいそうです。